

奥にドアがある。屋外への出入り口として使う。  
ドア付近に窓があり、外の様子が見える。開閉可能。  
下手に隣りの部屋へ通じるドアがある。  
中央にローテーブル、下手にデスクがある。  
下手側壁、奥の方に棚がある。  
木の丸椅子や、木箱があたりに無造作に置かれている。  
舞台の上手奥に、大きなグライダーがある。

隣り部屋のドアが開いている。中から、野球実況のラジオ放送が聴こえる。  
隣り部屋から書類を抱えて出て来るケビン。六十代後半。老人なりたて。  
書類を机に置き、大雑把に分類して整理する。ラジオの実況に反応する。  
また部屋へ戻り、しばらくすると再び書類を抱えて帰って来る。  
そして机で分類、整理する。目当ての資料がないことに気がつく。

ケビン あれ？……ん？（書類を離れて眺めてみるが、ない）……あれ？

ケビン、さらに距離を持って、机から離れて眺める。

ケビン んん〜……あ。……ああ、そかそか（机の脇にある本棚へ行き、一冊の本を手取る）ここだ……（本を開き、パラパラと読む）

ドアベルが鳴る。

ケビン お。おお（反応して部屋の時計を見る）

ケビン、本を書類の上に置き、上手へ退場。ラジオは点けっ放し。  
しばらくして、上手よりマーガレットを伴って入場。

ケビン 狭苦しくて申し訳ないが  
マーガレット いえ。失礼します  
ケビン さ、さ、かけてかけて  
マーガレット ありがとうございます（長椅子に座る）ラジオ、ですか？

ケビン　ん？あ、そうか。失礼失礼（隣り部屋へ行く）  
マーガレット　いや、その、特に、構いま、せん、が……（声を追わせて）

ケビン、隣り部屋へ行き、ラジオのスイッチを切る。すぐ出て来る。

ケビン　いやあ、すまない

マーガレット　いえ

ケビン　もう習慣でね、野球やってたら点けっ放し

マーガレット　ああ

ケビン　隠居老人のささやかな楽しみさ

マーガレット　やはり、レッズですか

ケビン　もちろん。生まれた時からな

マーガレット　なるほど（笑）

ケビン　（笑）さて、まずは、お茶だな、お茶

マーガレット　あの、お構いなく

ケビン　そういうワケにはいかないよ。コーヒー、紅茶、レモネード。さあ、

どうする？

マーガレット　……じゃあ、紅茶で

ケビン　いい選択だ

ケビン、上手へ退場。

以降、「居間のマーガレット」と「キッチンのケビン」のやり取り。

ケビン（声）　いやね、本当ならこういうことは、カミさんにやってもらうん

だけど、今フラメンコ行つてさ

マーガレット　え、なんです？

ケビン（声）　ん？

マーガレット　いや、どこに？

ケビン（声）　ああ。フラメンコお。フラメンコ教室う

マーガレット　あ、ああ、それは、お元氣なんですネ

ケビン（声）　友達に誘われて、イヤイヤ始めたんだけどさ、もうのめり込む

のめり込む。今じゃウチでも情熱的に練習してるんだから。はっはー

マーガレット　へえ、そうなんですかあ

ケビン（声）　（徐々に上手より戻って来ながら）タンタンスタン・タンスタ  
ン、タンタンスタン・タン！で、見てコレ。カミさんが踏み抜いた  
跡（床を指差す。床、修復の跡がある）

マーガレット　え！あ、え？

ケビン　まさか踏み抜くとはなあ……。ええと、御名前はなんだっけ？

マーガレット　マーガレット。マーガレット・ニコルズです

ケビン　マーガレットくん。なんにせよ、我が妻こと「情熱の老婆」は夜ま  
で帰って来ない。焦らずとも、じっくり話ができるということだ

マーガレット　本日はお時間をいただき、ありがとうございます。フリード  
マンさん

ケビン　堅苦しいのはよそう。ケビンでいい

マーガレット　はい、ケビンさん

ケビン　うん。それで（椅子に座る）僕に聞きたい話というのは……

マーガレット　ライト兄弟についてです

ケビン　おお、そうか、ライト兄弟だったか。しかし、なんで今更

マーガレット　はい、ご説明いたします

マーガレット、バッグから本（教科書）を数冊取り出す。

マーガレット　こちらは弊社が発行しているオハイオ州の教科書です（ケビ  
ンに渡す）

ケビン　（受け取り）ほお

マーガレット　来年に改訂をするんですが、これを機に「ライト兄弟」をよ  
り大きく取り上げる予定です

ケビン　そりゃ、どうして

マーガレット　だって来年は「ライト兄弟初飛行五〇周年」じゃないですか  
ケビン　ああ、なるほど。（教科書を開いて眺める）……へえ、ライト兄弟が  
教科書に載ってるんだねえ

マーガレット　それは、オハイオ州が生んだ英雄ですから

ケビン　英雄、ね

マーガレット　そこでぜひ、ケビンさんのご著書『ザ・ライトブラザーズ』

のお話を、お窥いしたいと思っています

ケビン うんうん。……そうか。ただね、随分昔のことだから、ちゃんと思

い出せるかど……うか、……ちよつと待つて

マーガレット え？

ケビン 君……、何か聴こえないか？

マーガレット ……ん、……何か、泡立つ音が……

ケビン あうっ！（立ち上がる）湯を沸かしっぱなしだ！（上手へ退場）

マーガレット え？あ、ああ

ケビン（声） ああー、いかーん！地獄のように煮えたぎっているぞ。こりや

いかん。……あつはつは、待つてろお。今この老いぼれが、命がけで

紅茶を淹れてやるからな

マーガレット あの、お構いなく……

ケビン（声） ああつ、湯気が。湯気が。湯気で何も見えない

マーガレット あの、冷ましてからでも……

ケビン（声） あ、ダーズリンしかないが、いいかね？

マーガレット え、……はい、ダーズリンで

ケビン（声） ……よし、今だ！……うはー、こりやダーズリンも災難だ。は

っはっは。……あ、そうだ、マーガレットくん

マーガレット はい

ケビン（声） 砂糖は必要な人？

マーガレット あ、はい、お願いします

ケビン（声） あ、すまない。ちよつとないんだよねえ

マーガレット え、……はい

ケビン（声） いやね、砂糖くらい出したいんだが、僕糖尿でさあ

間。

ケビン（声） 僕糖尿でさあ

マーガレット 聴こえてますう

ケビン（声） うん。でね、砂糖はカミさん管理で、金庫に仕舞ってあるんだ

マーガレット き、金庫？

ケビン（声） なあ？オドロキだろ。金庫破りが来たら、イケナイ粉と勘違い

するんじゃないか。ええ？ はっはっは

マーガレット　ははは……

ケビン（声）　さあさあ、お待たせ

ケビン、言いながら、上手よりトレイにカップ二杯を乗せて入場。

カップから湯気が、ドライアイスのごとくモクモク出ている。

ケビン、トレイごとテーブルに置く。

二人で、モクモクのカップをしばし眺める。

ケビン　……さあ、召し上がれ

マーガレット　はい……、もう少ししたら

ケビン　君は……、猫舌かい？

マーガレット　そういう問題じゃ、ないです……

ケビン　そうだな。本能的に、そうだな。うむ、しばし待とう。……で、何だっけ？

マーガレット　え？ あ、ケビンさんの「ご著書」について、です

ケビン　ああ、ご著書ご著書、ご著書の話だ。……あ、ところで、このライ

ト兄弟の記述だがね（教科書を手に取り）

マーガレット　何か誤りがありましたか？

ケビン　ううん。これね、無駄が無くて、よくまとまってるよ

マーガレット　ああ、よかった

ケビン　これに無駄を増やして、まとめるのを怠ったのが、僕のご著書だ

マーガレット　え？

ケビン　僕のご著書は読んだかい？

マーガレット　それが、まだ……

ケビン　うん、だと思った

マーガレット　方々、探してはみたのですが、なかなか手に入らなくて……

ケビン　絶版になったのは、もう随分昔だからね

マーガレット　申し訳ありません

ケビン　はは、申し訳ないことはないさ

ケビン、立って机へ寄り、書類の上に置かれた本を手取る。

ケビン そんな君に、この本を貸してあげよう

マーガレット え？

ケビン 僕のご著書だ

マーガレット あ……、いいんですか？

ケビン もちろんだ（本を渡す）

マーガレット ありがとうございます（受け取り、少し中身を見る）

ケビン 参考になるかな。「兄弟が力を合わせて、努力と知恵で苦難を乗り切

る」お決まりのヤツが、長々と書かれているだけだが

マーガレット いえ、とんでもない。助かります

ケビン そうかい。……うん、これで、……君がここに来た目的は達せられ

たワケだ

マーガレット え？

ケビン 仕事はこれで終わりだ

マーガレット でも、まだお話を窺っておりませんが

ケビン 教科書に載せるようなことだったら、その本に尋ねたらいい

マーガレット いや、でも……

ケビン だから今日は、僕がしたい方の話をしよう

マーガレット したい、方？

ケビン およそ、教科書や伝記には載りそうもない話だ。どうか、仕事が早

く終わった余暇を使って、この老人めにお付き合いいただきたい

マーガレット いえ、そんな、ぜひお願いします

ケビン うむ、ありがとう。……これは、僕が彼らと体験した「ある出来事」

についての話だ

マーガレット 「ある出来事」……？

ケビン 僕が、ライト兄弟と初めて会った、一九〇九年の秋のことだ。ウィ

ルバーさんは四十二才、オービルさんは三十八才。そして当時の僕は、

志高く、夢見る若き新聞記者だった。その日は、編集長から特別な任

務を託されて、初めてライト兄弟の作業小屋までやってきた

奥のドアから「ノック音」がする。

ケビン その時、作業小屋では使用人が全力でサボっていた

マーガレット 全力で？

メリー、入場。メイド姿。デスク椅子に座り、全力でサボる。  
メリー、スケッチブックを開き、何か読んでいる。

しばし、「一九五三年」と「一九〇九年」の世界が同時進行する。

「ノック音」がするが、メリー、無反応。

ドアが、少しだけ開く。

若ケビン（声） ごめんくださーい

メリー （無反応）

若ケビン（声） ごめんくださーい、ライトさーん

マーガレット これ、ケビンさんですか？

ケビン ああ、そうだ

若ケビン すみませーん、ライトさーん（奥のドアを完全に開ける。老いたケビンとスタイルが随分違う二枚目な若ケビン）

マーガレット これ、ケビンさんですか！

「一九〇九年」の世界、時間が止まり、メリー、若ケビン、動きを止める。

ケビン ああ、そうだが、何か問題があるかね？

マーガレット 問題……は、だって、骨格が……

ケビン 骨格？

マーガレット ず、頭蓋骨が……

ケビン 頭蓋骨？ 基本的に同じじゃないか（若ケビンと並んで同じポーズ）

マーガレット 同じじゃないっ

ケビン 年を取ると、いろいろ縮むから

マーガレット そうでしょうか

ケビン ……うん、どうしたって、思い出は美化されてしまうものさ

マーガレット 美化って（見比べる）、……二頭身くらい差が

ケビン 若かったあ。（若ケビンの腹筋をアピール）腹筋もこの通りだ

マーガレット （触る）ああ、割れてますね

ケビン まあな。今だってその気になれば、腹筋の六つや七つくらい、

マーガレット (食い気味に) 奇数?

ケビン ああ、奇数だ。さ、話を続けよう

マーガレット お、お願いします

ケビン、マーガレット、上手ヘトレイを持って退場。

「一九〇九年」の世界、動き始める。

メリー (スケッチブックを読んでいる)

若ケビン あの…… (メリーに近づく)

メリー ……お (ケビンに気づく)

若ケビン あ、どうも

メリー はい、どうも。……うん (ゆっくり再び読み出す)

若ケビン え……、いや、あの……?

メリー んんっ、なに? あなた誰?

若ケビン え、あ、私は、デイトン・ニューズのケビン・フリードマンです。

本日はライト兄弟さまがお呼び立てとのことで、参りました

メリー うむ。……そうか。……よし (再び読み出す)

若ケビン ……いえ、あの

メリー なあーにつ? あたし今集中してんだから、ジャマしないでよね

若ケビン えっと、なんでしょう、人を見かけで判断してはいけません、

使用人の方ですよ?

メリー (自分の衣装を見る) そうね。使用人よ、正解

若ケビン それでは、その、案内というかお取り次ぎをお願いしたい (遮ら

れる)

メリー 自己紹介する?

若ケビン え、……ええと

メリー あたし、メリー・ホール。この家の唯一の使用人。今日も元気よ

若ケビン ああ、それは何よりで

メリー あたし、何してるように見える?

若ケビン ……えっと、読書……というか休憩中、かな

メリー そう、休憩中。独断型休憩中

若ケビン 独断……



メリー あなたお客さん？

若ケビン ええ、まあ

メリー あたし使用人？

若ケビン え。さつき、そう……

メリー ということは、だ。あたしがあなたを案内したり、取り次いだりした方が無難よね

若ケビン そうですね、そうしてもらえると助か（遮られる）

メリー でもあたしたち……始まつちやつたじゃない？

若ケビン え、始ま、始まつちやつた？

メリー このままの関係でいるのが、お互いのためだと思ふの

若ケビン ええと……お互い？

メリー それから、ここはライト兄弟の作業小屋。訪ねるなら隣りの本宅の方がいいわよ（読み始める）

若ケビン はい。でも、僕はこちらの方へ訪ねるよう言われてるので、問題ないと思ふの……ですが……

メリー （聞いていない。読んでいる）

若ケビン ……うん（聞いてもらえてないことを認識） ……とりあえず、本宅を訪ねた方がいいでしょうか？

メリー （読んでいる）

若ケビン こちらは、誰もいらつしやらないようですし

メリー あたしがいるじゃない

若ケビン いや、そうですか……

メリー あなたには、あたしがいるじゃない

若ケビン あの、じゃあお取り次ぎを……

メリー うん、そうね。あたしがこの場を離れずに、あなたを取り次げる、そんなとんちの利いた方法を、一緒に考えない？

若ケビン 本宅へ行きます（奥のドアへ向かう）

メリー 待て待て待て

若ケビン いや、だつて

メリー 待たれよお、お若いの。彼らは今、食事中。訪ねない方がいいわ

若ケビン ……（動かない）

メリー しばらくしたら戻って来るから、ここで待ってなさい。あたしも、

付き合うじゃん？

若ケビン (ため息をひとつ) ……参ったなあ(座る)

メリー 読む？(スケッチブックを開いて勧める)

若ケビン いえ(と言うが、見る) ……これは何ですか？

メリー マンガ。新聞に連載してあるものを、彼らがスクラップしてるの。

マメでしょ？

若ケビン (ページをめくる) ……お、ビツシリ。確かに

メリー 読み出すと止められないのよねえ

キャサリン(声) いいや、言った

オービル(声) 言っていないって

キャサリン、オービル、奥入口から話しながら登場。

メリー、キャサリンから隠れる。若ケビン、何となくついて行く。

キャサリン 絶対言った、「返り討ち」って

オービル 言っていない。聞き間違いだろ

キャサリン 言った。シャヌートさんの話をしてる時に、「返り討ちにしてや

る」って悪い顔して言った

オービル 「おもてなし」の聞き間違いだよ

キャサリン 一文字も合っていない。どいて、ウイルバーと話す

オービル ちよちよちよ、ダメダメ、今ダメだって(止める)

キャサリン 何か企んでるでしょ。ウイルバーに聞いた方が早い

若ケビン (メリーに小声で) え？ウイルバーさん、いたんですか？

メリー え、いたんですか？(若ケビンにそのまま返す)

オービル 今集中してんだから、ジヤマすんなって

キャサリン 知らないわよ。お昼も摂らずに何してんのよ

オービル 研究に決まってるんだろ。今大詰めなんだから、ジヤマしちやいけ

ないんだって、な？(近くにいた若ケビンに同意を求める)

若ケビン あ、はい。初めまして

オービル 初めまして。(キャサリンに) だからここは、聞き間違いだったっ

てことでひとつ、誰だ君は(急に切り替えて若ケビンに)

若ケビン あ、ケビン・フリードマンです。